

入選

額賀 梨百 (ぬかがりお) みなみ野君田小 6年生

作品名：わたしも、がんばるよ。

図 書：わたし、がんばったよ

私はデパートの本屋にいた。好きな本を立ち読みしようと思って。うろうろしていたら、チラッと表紙が見えた。ピンクだし、題名もひらがなだった。だから、幼い女の子向けの絵本かな?と思った。あれから一年ほどたった今。消えたはずのその記憶がまだ残っていたらしい。電子図書で、あの本を見つけた。よく覚えていないけれど、表紙のベッドの上でピースをしている女の子は、あの時のピンクの本だってピンときた。

読んでみようと思ってひらいたら、なんと、文字があった。いや、当たり前だけど、もっと絵が書いてあって、文字少なめの“絵本”かと思っていたから、びっくりして。ページを進めると、どんどん夢中になって、読みおわってしまった。それは、4才の女の子・実咲ちゃんが病気になってしまう話だった。それも、ただの病気ではない。急性骨髄性白血病。血液のガンで、五人に四人が死んでしまう、恐ろしい病気。実咲ちゃんは、病気を頑張って治し、学校に行く。

この話では、実咲ちゃんが病気とたたかう、というより、自分とたたかっていた。この病気を治すには、たくさんの抗ガン剤を使い、ずっと痛い思いをしなければならない。ありえないくらいまずいシロップや、痛いマルクをしないと、戻れないのだ。実咲ちゃんは、ほんとうに大丈夫なのか、実は治らないのではないかと不安な気持ちばかりを抱いていた。一度、お母さんにハツ当たりもしている。それでも、痛くてつらくて苦しい病院生活に立ち向かう姿は、私よりはるかに年上で、手の届かない存在のように思えた。

そして、ついに念願の生活を手に入れる。ぎりぎり入学式にも出られ、めでたくたくさんの友達もでき…とはいかなかった。毎日マスクをし、長そでを着て、体育は見学し、そうじにも参加できない。そんな実咲ちゃんは、入学しても、いじめにあう、かわいそうな子になってしまっていた。周りのずるい、という声が届いて、どう思ったのだろう。当然、つらいだろう。病気の次にいじめだなんて。私なら耐えられない苦しさがあった。精神的な苦しさだ。だから、実咲ちゃんも苦しかっただろう。いじめっ子、ひどいな、と思った。こんなに一生懸命病気を乗り越え、やっと手に入れた生活で待っていたのは、いじめなのだ。文字を読んでいるだけなのに、なぜか怒りがこみ上げてくるほど、いじめっ子のひどさがわかったような気がした。

でも、実咲ちゃんは負けなかった。病気にもいじめにも。まっすぐ未来に向かって歩く、私よりもはるかに上の神様のようだ。それに比べれば、私は小さなアリのような存在なのかもしれない。年齢は私が上なのに。でも、それだけ実咲ちゃんが頑張ったのだ。その証拠に、この本の題名の「わたし、がんばったよ。」という言葉を見て、涙が出てしまった。だから、私は自分に、家族に、友達に小さな決意をした。

「わたしも、がんばるよ。」

と。